

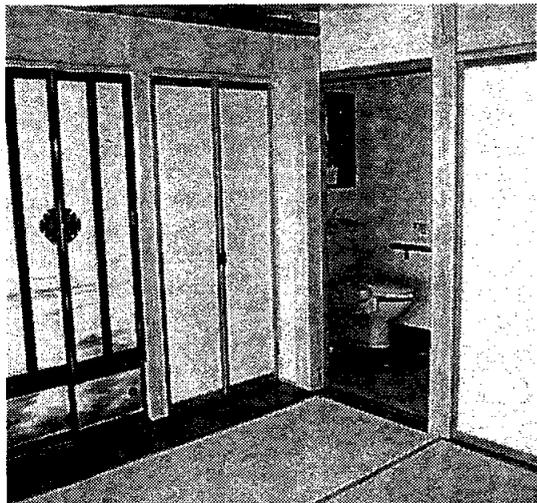
ささえあい

共生未来へ

<1>

住まいのヒント

医療、福祉、建築の専門家ネットワーク「快適住まい環境研究会」代表を務める杉田収・県立看護短大教授に、だれもが住みやすい住まいづくりのヒントを伝えてもらう。



寝室の隣に引戸の専用トイレ、熱線センサー付き自動スイッチ照明と昇降便座を設置

◇ 新潟市で一人暮らしをする母は八十一歳。今ほとんども元気でですが将来の介護準備と自分たちの老後のため二年前に新築したわが家を紹介しします。

考えた住宅のキーワードは「介護」「バリアフリー」「雪」「安心」「省エネ」「環境」。まず母の寝室の隣には専用トイレを用意しました。だれもが年を取れば足腰は弱り、腎機能も低下して夜中に何度もトイレに行くことになります。ベッドとトイレは近い方がよいでしょう。昔と違い水洗なのでほとんどにおいません。ほかに二階と、外来者用として玄関近くに

計三方所のトイレを造りました。ふるはトイレの隣に設置し、どちらかが狭い状況になったらふろとトイレの壁を取り払えるようにしました。天井走行リフトでベッド、トイレ、ふろへと移送できるように準備だけしてあります。

わが家紹介

母のため専用トイレ

霧がなかったことがうれしい変化でした。今年の冬は高田で最高積雪が一四〇センチでしたが家は耐雪型ですので、屋根雪はそのまま放置。暖房は灯油のパネルヒーターを採用しました。冬の朝、板の間を素足で歩くのは身の縮む思いですが一八度の室温は素足で大丈夫です。借家のころは暖房できる部屋が限定されましたが、新住宅は全室暖房になりました。また「安心」のため都市ガスを引き込みます。台所は電磁調理器とクッキングヒーターを設置、給湯は深夜電力を使用しました。

以前の光熱費は月平均一万二千円でしたが、新住宅は月三千円ほど増えました。そこでエネルギー消費を抑えるため、太陽光発電装置を設置。それによって年間全消費電力の二五・五%を補いました。こうして、これらの住まいは「どうあるべきか、住みながら「実験」を続けています。

す。住宅の完成時には近所の方々に公開し、二百人ほどの見学者が来られました。小さな家です。で、一時は身動きがでないほどの人であふれかえりました。一年間住み、除雪作業が少なくなること、冬の室内温度が昼間は二〇度、朝方は一八度に保てたこと、窓の結露がなかったこと、

× ×

すきた・おなむ 一九四四年生まれ、上越市在住。新潟大医学部附属病院講師を経て九四年から現職。